

フランスの古書にまつわる回想

横浜国立大学国際社会科学研究院教授 今村 与一

もう20年以上も前のことである。初めてフランスの地を踏み、パンテオンの丘の一角を占めるキュジャス図書館で最初に閲覧を求めたのが、ジャン・ブチエ(J. Boutillier)の同図書館所蔵本、《Somme rurale》であった。14世紀に書かれた慣習法集の1486年版、いまだ写本文化が残るゲーテンベルクと同時代の木版活字本、しかも保存状態のよい豪華本である。ところが、意外にもその大型本を届けてくれた職員の扱いはぞんざいであった。留学中の指導を引き受けてもらった老教授との面会が許されたのも、ちょうどその頃である。

今から考えれば、実に生意気な留学生であった。書庫の片隅で必死に書き留めたブチエの一節を示し、初対面の老教授に質問したのだ。しかし、老教授は、要領を得ない質問を受け流したりはせず、一生懸命に答えてくれた。学問の風雪を耐え抜いてきた風貌だが、その横顔がみるみる紅潮し、ひとりの留学生のために熱弁をふるう教授のひたむきさに感銘を受けた。

当時はまだ、セース左岸のはずれに完成したミッテラン図書館への引越しの最中であつた。老教授の書齋を訪ねる日以外は、毎日のようにリシュリュ通り面に面した国立図書館に通つた。一番大きな閲覧室では、高い丸天井を囲む壁面に数えきれないほどの古書が並んでいた。ほとんど複写は認められないから、文献との格闘が来る日も来る日も続いた。次に読むべき文献は芋づる式に膨れ上がってゆく。留学生活も2年目に入る頃には、待ち焦がれた古書を手にする喜びよりも、うずたかく積もった文献の量、西欧の法文化の重圧に打ちひしがれる思いが強くなった。無理押しで体調を崩し、とうとう老教授の個人授業からも遠ざかってしまった。

「生きているか、死んでいたのか。」老教授の電話である。再び老教授との対話が始まった。しかし、今度は、「本を書け」という彼の助言により、拙いフランス語の作文を添削指導してもらう機会となった。いつも真っ赤に直された原稿を返され、これはこれで地獄のような特訓であった。その指導からどれだけのものを身につけることができただろうか。少なくとも出来のよい学生ではなかった。

現在では、自分自身が留学生の指導に当たる立場である。外国法研究の困難さは痛いほどよくわかる。けれども、彼らが帰国したあとも生き続ける研究を心がけてほしいと願うばかりである。実を言えば、留学中に綴ったノート類は、私にとってかけがえのない宝物である。フランスから見て外国人研究者の自分にしかできない研究とは、まだまだ表面的なフランス法理解を深めること、そして、フランス法と全く同列におかれた日本法の現状分析に役立てることである。もっと自覚的に日仏両法の異同を追究しなければ、とても対等に論じ合える関係にはなれないと考えるからだ。そのためにも、フランス法の紹介は、どこまでも正確無比でなければならない。実践的意欲が先行するあまり、バイアスのかかったような紹介で満足してはいけない。このことは、研究者志望の日本の学生にもよく話すのだが、どれくらい伝わっているだろう。

ともあれ、日頃の感謝の気持ちを込めてこの一文を国際書房に捧げたい。